

<司会付記>

上記掲載のような報告者の刺激的な報告に対して、講演会参加者から鋭い質問が出され、それを報告者が激しく切り返すというように、時にやや加熱ぎみとも思われる白熱した討論がおこなわれたが、当研究所事務局の不手際で討論部分の録音がとられておらず、それを再現できないのが残念である。以下に記すのは、当日司会をつとめた者が記憶を頼りに印象記風にまとめたものに感想を付け加えたものである。したがって、正確な要約ではないし、感想は独善的なものである。ありうべき誤りのすべての責任は司会者であった文責者にある。

ソ連におけるペレストロイカの進展、「東欧革命」の展開、「天安門事件」の衝撃と、「社会主義の消滅」との評価が下されても不思議ではない「社会主義圏」の激動は、「市民社会と社会主義」という枠組みを設定して日本の社会科学界をリードした内田義彦の学問的営為を時論的に問う、恰好の環境を提供したようである。内田の「日本資本主義像」を批判的に取り上げた長報告、内田的社会科学論の成熟過程を内在的に究明しようとした吉澤報告も、「市民社会」なき「社会主義」の暗澹たる事態を克明に紹介した小沼報告に喰われてしまった。それは、長報告・吉澤報告に迫力がなかったからでも、小沼報告が特に優れていたからでもなかった。そうではなく、社会主義の存立根拠を問うようなかたちでの小沼報告が、現在の「社会主義圏」の激動を、「市民社会なき社会主義の危機」として見るだけで済まされるのかという、内田社会科学の根本命題を問う問題を提起し、それが様々なマルクス研究者を触発したという、時論的な文脈の中での出来事であった。したがって、ほとんどすべての議論が、内田社会主義論にかかわるものであった。いくつかを紹介してみよう。

もっとも素朴かつ本質的な質問は、内田義彦の「現存社会主義」観はどのようなものであったのか、というものであった。この質問に対しては、内田が生前「封建的社会主義」とか「前期的社会主義」などという言葉を使っていたこと、したがって厳しい批判的な目を向けていたことが指摘されたが、同時に、現段階で見ると内田の「社会主義観」に楽観的なところがあって、例えば、ウェーバーの「社会主義論」などには共感できなかったのではないか、ということが報告者から指摘された。これに対しては、内田のスミス像そのものが「現存社会主義」批判を内在しているのであって、楽観的と言うのは当たらないとの批判があった。すなわち、内田の描く重商主義批判者としてのスミス像は、天皇制国家に対する批判だけではなく国権的社会主義に対する批判をも意図していたという指摘である。また、「最終講義」で語られた内田の『ガリヴァー旅行記』の中の「馬の国」の位置づけは、内田の社会主義観がかならずしも楽観的なものではなかったことを示しているとの指摘もあった。そして、内

田社会科学論からすれば、東欧＝ソ連の政治・経済改革は、「市民社会なき社会主義」であることから生み出された必然的な事態であり、我々が継承すべきなのは「内田市民社会論」だとの内田学に内在した批判が提起された。

以上が司会者の印象に残った議論であるが、学問の批判と継承の難しさを身をもって痛感させられた講演会であった。時論を理論の枠組みの中に組み込むことを提唱し続けた内田が時論の文脈の中で語られることは、皮肉な巡り合わせと言うほかはないが、「市民社会と社会主義」という枠組みを設定した内田であってみれば、やむを得ないことかもしれない。だが、司会者の不手際を棚上げして言わせてもらえば、それにしても、「内田義彦が遺したものを語る講演会としては内容的には寂しかった。小沼報告がホットでありすぎたにせよ（内田の学問とのかかわりを述べる責任は小沼氏にもあった）、もし継承すべきものが「市民社会論」であるとするならば、「内田市民社会論」を掘り下げる形での議論が展開されなければならなかった。内田が大病の後に遺言のようにして書いた「河上肇——一つの試論——」（『著作集第8巻所収）に収められている「マルクス主義の経済学者へ」は、そのことを強く要請しているはずである。内田が意識して遺したこの重い課題は、ますます緊急性を帯びている。内田の継承は「内田いじり」で終わってはならないのである。（文責 常行敏夫）